

# 箱のなか

# 涼虫の平日

---

ホチキスの針と平和

---

ホチキスの針はふいに切れる。

仕事が慌ただしいときに限って切れる気がする。  
そういう時はホチキスを多用するからだろうか。

ぼそ、と、紙の上で針のないことを知らせる音が鳴る。ああつ、と思う。  
ひどいときは抗議の声まであげてしまう。

ホチキスの針を誰かが補充してくれたらいいのになあ。私は呟く。  
針は一気にたくさん補充ができない。弾（ひとかたまりのこと）はふたつが限界だ。

私は夢想する。

そのひとは私が退社した後に、さりげなく机の前に立って青いホチキスを手に取る。  
一センチくらいになった弾を手のひらに取り出し、新たに箱から出した新品の弾を  
ふたつこめる。  
取り出した弾を落とさないように握り、ホチキスを元の場所にそっと戻す。

そしてある日私は気づく。しばらくホチキスの針が切れていないことに。

私は毎朝、ホチキスを開いて針の量を確認できるようになる。  
新しい弾がふたつ、びしっと整列している。  
前の日にたくさん使った日も、少ししか使わなかった日も、風の日も、雪の日も。

使いさしの針はどこへいったのだろう。  
もしかするとそのひとのホチキスの中には、私の小さくなった欠片のような弾が  
ぎっしりとつまっているのかもしれない...

ある残業の夜、私はふだん机に出しっ放しにしているホチキスを引き出しの奥にしまう。  
電卓を上重ねて見えないようにして。ストールを巻き、周りに挨拶して退社する。  
そのひとは今夜、私のホチキスを見つけるだろうか。

次の朝、引き出しを開けて電卓を持ち上げると、ホチキスは昨日しまった場所にある。  
私は幾分ほっとして、ホチキスを手に取る。ひんやりとした重みを感じる。  
指先でそっと上下に開く。

針は満杯まで補充されている。いつもと同じように。

ここまで想像してから思う。

匿名の優しさってちょっと怖い。

それは氣遣いの域を超えているような気がする。（自分が望んでおいてなんだけど）

やっぱりホチキスの針は自分で補充するのがいい。

ああっ、どうしてこのタイミングで?!とぶつぶつ文句をいいながら。

平和って優しくされすぎないこと、なのかもしれない。

# ごはん道

---

その1

---

数ヶ月前、最寄りの地下鉄の駅から駐輪場に行くには、  
駅ビルの地下を歩いて行くのが一番早いという事に気がついた。

その日も駐輪場に向かうために、改札を抜けると「出口」と書かれた  
看板の方ではなく「●●ゴールデンセンター地下街」の方へ向かう。

地下センター街に続く階段を上るとすぐに某ファーストフード店があって、  
その横に真っ赤な塗料で塗ってある板に、漢字ばかりが並んだ看板が見える。  
中国漢方料理「●●家」と書いてある。

ランチタイムが終わりそうな時間。  
店内には誰もいなくて、白いエプロンをかけた女性が  
大きく大きく伸びをしているのが見えた。

メニュー表を覗いてみる。  
踊るような手書きの文字で「スッポン身入りスープセット」とか  
「宝湯（何と読むのかわからない上に、もしかすると間違えて覚えているかもしれない）  
おかゆセット。杏仁豆腐付き」とかある。  
店の前のリノリウムの廊下で、三輪車に乗った2歳くらいの女の子が遊んでいる。  
その隣で薄い背中をこちらに向けたコック姿の男性が、逆さまにした白い板重に座り、  
背中を丸めて何かを抱え込むようにして、一心不乱に何かをしている。

うっすらとカビみみたいな湿ったような匂いが漂っている。  
それは、背中を丸めた男性に近づけば近づくほど強くなる。  
何となくお葬式の匂いに似ていると思う。

コック姿の男性の手元から黒々とした赤ちゃんの首くらいの大きさの何かが見える。  
胃が一瞬ふわっと浮かんだ気がした。気持ち悪いとかそういう感情がなく、  
ただただ胃が体の中でぐっと浮かんだ気がした。

男性が「よっこらせ」といった感じで立ち上がり、ゆっくりと私の方に顔を向けた。  
ぎょろっとした大きな目と私の視線が合う。  
目が合うと、どうしてか何か話さなくてはならないような気がしてしまう。

「こんにちは」とお辞儀をすると男性の大きなぎょろっとした目が5ミリほど垂れ下がる。  
「、何、しているんですか？」と聞いてみる。  
少し間がある。男性が足元の黒い塊を右手に持ち上げ  
「クマの手の毛を抜いているんだよ」と言う。

黒い塊が地面から浮かび上がった途端、ものすごい匂いがつかみかかるように襲ってくる。  
肩をガブリと噛み付かれたみたいな気がする。心臓がドキドキしてくる。

男性が空いた左手をひらひらと振って、手招きをしている。

「ああ気持ち悪いかも」という言葉が頭の中の遠くの方から聞こえるのに、がっぷりとつかまれて引っぱられるみたいに、クマの手の方へ足を2歩進める。

2歩進んだところで、足が止まってしまう。

男性と私の間には1メートル30センチ位の間がある。

「この、肉球がうまいんだよ」男性が満面の笑みを浮かべて言う。

黒い毛に埋まるように、つるんとした石みみたいな肉球が隠れている。

「肉球だ、、」私がそう言うと

「肉球だよ。すごい匂いだけど、一回食べたら病み付きになっちゃうよ。

機会があれば食べに来てよ」と言う。

ワイシャツ姿の若い男性が隣を通り過ぎた。ジーンズ姿でレジ袋を両手に下げた女性が続く。

横を通る時、カサッコソツという音が聞こえた。

「はい、、機会があれば、、」

そう言って、女性の後ろに続く。

地下街出口と書かれた黄色い表示が見えた。出口の自動扉ではないガラス戸には

「開けっ放し厳禁」という手書きの貼り紙がちょうど目の高さの位置に貼ってある。

ドアを押し開けた途端、耳の栓が抜けたようにざわざわと色々な音が聞こえてくる。

駐輪場に向かう途中、きっと私はクマの手を食べるんだろうな、

いつか食べるんだろうな、きっと食べちゃうんだろうなと思った。

夜はキャベツとチーズのオムレツを作った。(ち)

## 涼虫の読書案内

---

「ベッドの下のNADA」 井上荒野（文藝春秋）

---

この物語には、郊外にあるビルの地下でカフェを営む夫婦の秋から夏にかけての一年間が描かれている。

NADAでは美味しいコーヒーが飲める。  
大人の常連客たちがカウンターに鈴なりになるような店だ。  
皆、仲はいい。お花見やバーベキューに行くこともあるくらいに。  
そこには特別な事情も紛れ込んでいる。  
例えば元常連客の鮎子と夫の岩崎に、それから一番若い常連客、ミノルと妻の翠に。

誰かを好きになったけれど、愛したけれど。  
そこからの緩い下り坂の途中に登場人物たちはいる。  
彼らの感情の揺れはミリ単位レベルで綿密に描かれ、接写のまま長回しで撮った映像をみているようだ。産毛が風に揺れるのがわかるくらいに。

誰かとの間の神経症的な隙間というのは、疑心が生まれた瞬間に意識されるように思う。  
表層の自分と内面の自分は、疑心を確認する度にますます乖離していく。

相手が何を考えているのか、着地点はどこなのかを探り、あらゆる推測をしてその場で一番ふさわしいと思われる態度や言葉を選択する。  
今の対応はうまくいった、芝居がかっていた。  
岩崎夫妻と鮎子とミノル全員がそうしているから、関係はますます不透明感を増していく。  
好きじゃないふり、愛し合っているふり、逃げていないふり。屈託のないふり。  
なにも気づいていないふり。

私は女の読み手なので、女たちの心の動きはだいたい理解できる。  
興味深いのは男たちの心情だ。

岩崎は、それほど執着のない女たちに会い続ける。  
関わることは怖いけれど関わるのをやめるのはもっと怖い、という。  
上塗り、という言葉を感じる。キャンバスに何重にも絵の具を塗って、  
そもそも元の絵がなんだったのか全部わからなくさせたいような気持ち。  
その作業を自分ではやめることはできなくて、誰かに見つけてもらいたいかもしれない。  
キャンバスを真っ白なものに取り替えて、そうしたら...と何かを期待する気持ち。  
歪んだ甘えだと思ふ。  
けれどそういうやりきれなさが、魅力として滲む場合もあるのだろうな、と想像する。

ミノルは、ごくごく遠回しに翠へ想いを伝え続ける。  
けれどその態度と言葉はニュートラルの域からなかなか出ない。  
こういう頑なに傷つきたくないひとは難しい。好きなのか迷惑なのか何でもないのか全然わからない。

あなたもういいわ、と今まで何度も女に去られたタイプだろうな、と思う。  
ミノルの翠を傷つけたいという気持ちが時々透けて見える。  
翠が傷つくことで自分への想いを確認できるとでもいうように。  
そんな状態が長く続いて、ようやく彼が翠に種明かしをする瞬間がなんともいえずいい。  
屈折率が高すぎて。

自分の気持ちというのは意外によくわからないものだと思う。恋愛に関しては特に。  
感情はひとつではないし、複雑にしていけばきりが無い。  
心の中の混沌が結晶化してふっと浮かび上がってくる、そのアベレージでしか測れない。

彼ら夫婦の絆の中には、今はもう愛していないという事実が含まれている。  
それは哀しいことのように描かれてはいない。ただ今そうである、ということとして。  
それでもお互いを意識しているし依存している。相手の視線の中にいたいと思う。  
赤とグレーのグラデーションの中で二人は揺れ続ける。

事実が本当のことだとは限らない、という翠の言葉が印象的でずっと頭に残っている。  
そこにある、隔たりのことを思う。

ち

私ね、ペイズリー柄が怖いんです。へえ。どうしてですか。

ち 涼

なんか、生きてるっぽくないですか？津軽塗りも何か怖くて。

涼

津軽塗り？（画像を検索…）う、これはリアルですね。ペイズリーよりじつとり湿度を感じます。勾玉の連続みたい。

ち

そうそう！こういう柄って、肌にぴたつきつつついて、なかなかとれなさそう…虫っぽいというか、顕微鏡でのぞいた…ミトコンドリア！

すずちまの

重箱の

すみっこ

涼

あつ！細胞っぽい。

ち

でもね、友達にペイズリー柄大好き♥って人いるんです。身につけると気分が上がるんですって。

涼

ちよつとわかる。私ね、赤にペイズリー柄は合うなって思うんです。色が柄に負けてないですよ。躍動感ありますよね。（想像中…）やっぱ無理かも（笑）…

ち

唐草模様は好きなんですけど…

涼

私も好きですよ。ペイズリーより密集感少ないですよ。

ち

そうそう！それと、唐草模様は服には使われない、というのがいいんです。服になるとだめなんですわ。

ち

そうなんです…肌につけると思うとイヤ…もうね、私、今度ペイズリー柄見たら生き物にしか見えないですよ。あれは動きまますよ。じつとみてたら…きつと。

箱のなか (2013年初秋号)

涼虫 (bellring64@gmail.com)

涼虫の読書案内HP

<http://bellring64book.blog.fc2.com/>

ちまちま子 (chimachima513@gmail.com)

ちまちま通信HP

<http://chimachimaletters132.blog.fc2.com/>

Copyright © すずちま All Rights Reserved

深縹色  
#2a4073



## ネットプリントのご案内

---

漫画も入った「箱のなか（深縹）」は、全国のファミリーマート、ローソン、サンクス、サークルKのネットプリントができるコピー機からプリントできます。

---

### プリント方法

- 1、お近くのネットプリントができるファミリーマート、ローソン、サンクス、サークルKに行く。  
わからない場合は<http://evsmap.cvs-sds.com/CS/CC1948176406>で検索できます。
  - 2、コピー機で「ネットワークプリント」を選択する。
  - 3、ユーザー番号「MITJ52FGR6」を入力する。
  - 4、「箱のなか深縹号」を選択し、文章プリントを選択します。
  - 5、A3サイズになっているか確認後、プリントスタートボタンを押します。
  - 6、「箱のなか深縹号」がお手元に！！
- 半分に折って、そのまた半分の半分に折ると、、完成です！！

※申し訳ありませんが、コピー代20円のご負担をお願いします。

## 箱のなか

<http://p.booklog.jp/book/80639>

著者：すずちま企画

Twitter ID：suzuchima

制作者のHPは

(涼) 涼虫の読書案内：<http://bellring64book.blog.fc2.com/>

(ち) ちまちま通信：<http://chimachimaletters132.blog.fc2.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80639>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80639>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ